

サン・ラファエル賞



応募用紙

祝創業 50 周年企画イベント サン・ラファエルのエピソード・イラスト・写真 募集

作品記入欄

私の祖母は甘いものが大好きでした。だから戸棚には昔からたくさん甘いお菓子があって、買い物に行くと、いつも、いそいそとお菓子を買い、ている祖母の姿があった。祖母は、甘いものを食べる時、いつも私にお裾分けをくれる。「はい、はんぶんこよ。赤ちゃんはまだ小さいから1個全部は食べらんもんね。」そう言ってお菓子を半分に割ると、いつも少し大きいほうを私にくれた。本当はもっとたくさん食べたが、祖母ははんぶんこよ「おいしいね」と言いながら幸せそうに食べている時間を大事にした。

時を経て、私は社会人になり、勤務地である浜松市で一人暮らしを始めた。初めての一人暮らしに、初めての職場で、常に疲れが溜まっていたが、甘いものを口にする瞬間だけは肩の力が抜けて、楽に感じた。

ある日、同僚とショッピングモールに買い物に行くと、催し物の会場さんの列があった。列の先を見ていると、ショーケースにシュークリームが並んでいる。スーパードザン見かけのふっふふしたシューとは異なり、ドーム状にはシューに砂糖が掛かっていたそれは、もはや初めて見る食べ物だった。

「天使のシュークリームか。ちよと気にはならない？」私と同じく甘いものに目がない同僚が言った。

「氣にはなるね。並んでよか。」列の最後尾に並んで順番を待たが、夕方までこのこともあり、ショーケースの中にはそれほどたくさんのシュークリームはなかった。1人買ひ、2人買ひ、とうとう私たちの前のおばさんの番にきた。シュークリームは残り7個。なんとも、回、2つかな。と安心しかけた時におばさんは言った。「6個さよ。」

ショーケースの中には1つだけ取り残されたシュークリームがポツンと立っていた。おばさんは申し訳なさそうに私たちの顔と交互に見て「残り1つになっちゃって...」と頭を下げた。「どうする？」「はんぶんこよか。」「どうせね。」

家に持ち帰ると、ドームを崩さないように慎重に包丁を入れた。サクサク、いい音が響く。割ると、中には空気が抜けたシュークリームがぎゅっしてしまっていた。「いただきます。」

セーと頬張ると、私と同僚は目を合わせて同時に言った。「んーんー！（おいしいー！）」思わず笑みがこぼれた。

そして、私は半分のシュークリームを堪能しながら思った。このシュークリームを、おばあちゃんにも食べさせてあげたいなあ。さ、とちよと喜ぶけどなあ。...この前、おばあちゃんに会ったのはいつだった？おばあちゃんに、会いたいなあ。目頭がじわじわと熱くなった。

それから3ヶ月後、久しぶりの連休。私は閉店と同時にサン・ラファエルでシュークリームをたくさん買ひ込み、その足で実家に帰った。高速を使、2時間。懐かしい実家の前には笑顔のおばあちゃんが立っていた。「はい、おばあちゃん食べて。お土産よ。」祖母は顔をくしゃくしゃにして。「ありがと、ありがたいわね... ありがと。」祖母は手を合わせてお礼を言うと、こう続けた。「はんぶんこよか。」「はい、はい。買ったから、1個全部食べよ。」と言うと、祖母は困ったような顔をした。

「これまでの商品の中で、あなたの逸品を教えてください」 天使のシュークリーム

町名	ニックネーム
花川町	もりのくま

「ええね、おばあちゃんやから、あんまりたくさん食べらんもん...」そう言うと祖母はシュークリームを崩さないように、そっと半分を割り、少し大きいほうを私にくれた。

祖母は天使のシュークリームを頬張ると、幸せい、はっの顔で言った。「んん美味いシュークリーム、生まれて初めて食べたよ。美味しいねえ。半分にせんと、全部食べたら良かったわ(笑)」

「あはは。ほほ。もう1個食べよ？(笑)」

「ええ？ほほ。もう半分もらおうかしら...たくさん食べらんもんと言、たのはどの口や？」

「あはははは。」

そして結局、私と祖母は、はんぶんこよシュークリームを2回食べた。とても幸せな時間であった。

それから数年後、私は結婚し、2人の子宝に恵まれた。子供に作る上の子は、私とはんぶんこよの味が好きらしい。天使のシュークリームの大ファンになった。下の子はまだ食べられなけれど、私たちが食べていると「私も食べよ！」とぎゅんぎゅんに騒ぎ始める。手を伸ばしてくる。ま、と家族4人と天使のシュークリームを頬張る日はとう遠くない。

「大きくなったらはんぶんこよね。」

そう言うと、下の子はにこやかに笑った。

おめでとう!!

